

D-3

オリヤ語において、非情物主語が引き起こす、複文の統語的縮約

山部 順治（ノートルダム清心女子大学） yamabe@post.ndsu.ac.jp

キーワード：1. オリヤ語（印欧語、インド東部）；2. 記述的文法；3. 格、restructuring

1. 本発表の概要

第1節では、本発表の輪郭を示す。どんな構文を取り上げるか（1.1）を決める。それにどんな構造を想定するか（1.2）、構造がそうなる理由をどう説明するか（1.3）、大まかに述べる（詳しくは第2・3節で述べる）。

1.1 取り上げる構文

本発表は、オリヤ語の目的語制御構文を扱う。その構成は(1)のよう。例文は(2)。

- (1) [X が Y に [V1 するように] V2 する]

記号：X＝使役主；Y＝被使役者；V1・V2＝補文・主節の述語

[V1 とその従属要素] からなる部分を「補文」と呼ぶ。

- (2) *maalika hi~ gunu-ku ghara-Taa jhaaD-ibaa paai~ baadhya kar-ich-anti.*
owner EM Gunu-OBJ room-CL sweep-INF bound(adj.) make-PERF-3p
「店主が、グヌに部屋を掃除するようにさせた。」 1人を指す複数 (p) は尊敬の意味。

（以下では、(1)の表示方法にならって、使役主をX、被使役者をY、と呼ぶことがある。）

使役主Xは、(2)では人（店主）だが、(3)のように非情物（店主の指示）に替えてもよい。

- (3) *maalikanka nirdesa hi~ gunu-ku ghara-Taa jhaaD-ibaa paai~ baadhya kar-ich-i.*
owner's direction EM Gunu-OBJ room-CL sweep-INF bound(adj.) make-PERF-3s
「店主の指示が、グヌに部屋を掃除するようにさせた。」

主節述語V2は、例文(2)(3)では「形容詞+kar-ならせる」という2語からなる。(4)に類例をあげる。本発表で述べることは、これら述語に関してである。

- | | | | |
|-----|------------------------|--------------------|--------------------------------|
| (4) | <i>baadhya kar-</i> | make bound | (～する) ようにさせる、義務を負わせる、to compel |
| | <i>utchaahita kar-</i> | make willing | (～する) 気にさせる、to encourage |
| | <i>jogya kar-</i> | make fit(adj.) | (～する) ことができるようにならせる、to enable |
| | <i>prastuta kar-</i> | make ready(adj.) | (～する) ように用意させる |
| | <i>raaji kar-</i> | make content(adj.) | (～する) ことに同意させる |
| | <i>baaraNa kar-</i> | do prohibition | (～する) ことをさせない、to prevent |

本発表は守備範囲から、目的語制御構文であっても主節の述語V2が次のような場合を除外する。まず、単一の動詞からなるもの（例、prabarttaa- ‘to encourage’）（それらについては、調査不十分）。また、非情物の使役主を取ることがないもの（例、kah- ‘to tell’ 「言って命ずる」）（それらは、本稿の関心—非情物主語—とは無関係）。

1.2 構文の構造

例文(2)と(3)の統語構造がどのようなものであるかは、第2節で論ずる。

本発表の主張は、両者は次の点で相違する、というものだ。使役主Xが人である場合(2)では、(5)のように、補文は(Yと同一指示の)音形のない主語△を含んでいて、統語範疇としてはSである。また、△は主格NOMである。これに対し、Xが非情物である場合(3)では、(6)のように、複文はrestructuringという統語構造上の縮約

を被っている。すなわち、補文は主語△を含まず、統語範疇としてはSまでに至らずVPである。

(5) [S 人Xが Y_iに [S △_iNOM [VP V1するように]] V2する] =(2)

(6) [S 非情物Xが Yに [VP V1するように] V2する] =(3)

1.3 なぜ、ある場合に restructuring が起きるか

使役主Xが非情物である場合(5)に restructuring が生起するのはなぜか、理由は第3節で論ずる。

本発表の説明は、文中の格配置に関するある制約のせいである、というものだ。Xが非情物である文(6)は、補文がSであると、当該の制約に引っかかってしまう。補文をVPにするしかない。一方、Xが人である文(5)は、(補文をSにしてもVPにしても、)当該の制約と関わらないですむ。

この説明は、文法的仕組みとしては、統語的選択(subcategorization)に言及しない。例えば、“主節の述語V2をなす動詞は、(特定の場合に限って)VPを指定する”、という見方をしない。

2. 文の構造分析

第2節では、オリヤ語の目的語制御構文の構造は、使役主が人であるか非情物であるかによって、(5)と(6)（上掲）のように異なることを論ずる。そのような構造的相違を想定する根拠として、事象①～⑤に関する事実をあげる。5事象いずれも、Xが人の場合には可能であり、Xが非情物の場合には不可である。

- (7) ① 連続2名詞句を目的格OBJで標示
② 被使役者Yに係る遊離数量詞を主格NOMで標示
③ 被使役者Yを再帰代名詞で指示
④ partial control
⑤ (補文動詞V1が他動詞の場合に、その)対象が1または2人称になれるか

2.1 連続2名詞句を目的格OBJで標示

例文(8)のように、使役主Xが人である場合は、連続する2名詞句を目的格OBJ (-ku)で標示すること（以下、kuの連続、と呼ぶ）ことが可能。これに対し、(9)のように、Xが非情物である場合は、kuの連続は不可。なお、(8)(9)いずれにおいても、ghara-Taa「部屋」に-kuが付かなければ適格である。

- (8) *maalika hi~ gunu-ku ghara-Taa(-ku) jhaaD-ibaa paai~ baadhya kar-ich-anti.*
owner EM Gunu-OBJ room-C -OBJ sweep-INF compel-PERF-3p
「店主が、グヌに(-ku)部屋を(-ku)掃除するようにさせた。」
- (9) *maalikanka nirdesa hi~ gunu-ku ghara-Taa(*-ku) jhaaD-ibaa paai~ baadhya kar-ich-i.*
owner's direction EM Gunu-OBJ room-C -OBJ sweep-INF compel-PERF-3s
「店主の指示が、グヌに(-ku)部屋を(*-ku)掃除するようにさせた。」

例文(8)と(9)間のこの対比は以下のように説明できる。

kuの連続の分布は、一般的には、(10)のとおりである。（より詳しくは、山部2013）。

- (10) 同一の節(S)においては、kuの連続は不可。

例文(8)においては、(11)のように、補文はSである。2つの目的格名詞句は別々のS（補文と主節）に属するので、(10)はkuの連続を不可にしない。一方、(9)においては、補文はSに至らずVPである。2つの目的格名詞

句は同一の S (文全体) に属するので、ku の連続は排除される。

(11) [S 店主が グヌ_i-ku [S △_iNOM [VP 部屋-ku 掃除するように]] 義務を負わせた] (=8)

(12) [S 店主の指示が グヌ-ku [VP 部屋-ku 掃除するように] 義務を負わせた] (=9)

2.2 被使役者 Y に係る遊離数量詞を主格 NOM で標示

例文(13)のように、使役主 X が人である場合は、使役者 Y に係る遊離数量詞を主格 NOM で標示することが、(かろうじて) 可能である。これに対し、(14)のように、X が非情物である場合は、それが(まったく) 不可能である。なお、例文(13)(14)のいずれにおいても、当該の数量詞を目的格で標示することは(容易に) 可能である。

(13) *maalika hi~ pilaa-maana-nku seThiki { (?)samaste | samastanku } ekaa saangare jibaa paai~ baadhya ka-l-e.*
owner EM kid-p-OBJ there all.NOM | all-OBJ together go-INF compel-PAST-3p
「店主が、使用人たちに其処へみんな (NOM | OBJ) 一緒に行くようにさせた。」

(14) *maalikanka nirddesa hi~ pilaa-maana-nku seThiki { *samaste | samastanku } ekaa saangare jibaa paai~ baadhya ka-l-aa.*
owner's direction EM kid-p-OBJ there all.NOM | all-OBJ together go-INF compel-PAST-3s
「店主の指示が、使用人たちに其処へみんな (*NOM | OBJ) 一緒に行くようにさせた。」

例文(13)と(14)の間の対比は、以下のように説明できる。

遊離数量詞の格は、一般に、(15)のように決まる (山部 2015)。

(15) 遊離数量詞の格は、先行詞の格と同じになる。

(13)では、(5)のように、補文に主語△がありそれは主格だ。遊離数量詞は、△を先行詞にすれば主格になる。一方、(14)では、(6)のように、補文は△を欠く。つまり、遊離数量詞が主格になる素地がない。なお、どちらの場合も、主節中の名詞句 (pilaa-maana-nku) を先行詞にすることはでき、そうしたら目的格になる。

2.3 被使役者を再帰代名詞で指示

例文(16)のように、使役主 X が人である場合は、再帰代名詞 *nija* 「自分」は使役者 Y (マニ) を指すことができる。一方、(17)のように、Y が非情物である場合は、それができない (再帰代名詞を含んだ文は不適格である)。なお、(16)(17)のいずれについても、再帰代名詞を省いて出来る文は適格である。

(16) *maa maani-ku khaaibaa purbaru nija haata dhoibaa paai~ baadhya ka-l-e.*
mother Mani-OBJ eating before self's hand wash-INF compel-PAST-3p
「お母さんは、マニ_iに食事前に自分_iの手を洗うようにさせた。」

(17) *maanka kathaa maani-ku khaaibaa purbaru (*nija) haata dhoibaa paai~ baadhya ka-l-aa.*
mother speech Mani-OBJ eating before self's hand wash-INF compel-PAST-3s
「お母さんの言いつけは、マニに食事前に自分の手を洗うようにさせた。」

この対比は、以下のように説明できる。

再帰代名詞の分布は、一般的には、(18)のようである。(この点では、日本語「自分」と同様。)

(18) 再帰代名詞 *nija* の先行詞は(統語構造上の) 主語である。

(16)では、(5)のように、補文に主語△がある。再帰代名詞は、これを先行詞にすることでマニを指すことができる。一方、(17)では、再帰代名詞は、文中に先行詞を見つけられないため、現れることができない：まず、(6)のように、補文には△がない；また、主節中の名詞句 *maani-ku* 'Mani-OBJ' は主語でないので先行詞になれない。

2.4 ④ partial control

partial control とは、controller の指す集合と、補文動詞 V1 の動作者が指す集合との大小関係に関して、両者が同一でなく、[前者+その仲間] で後者となっている場合のことである。英語の例は(18)。ここでは、controller の John はジョン 1 人 (*i*) を指し、動作者の△は「ジョン+彼が会う相手」という複数人 (*i*+) を指す。

- (18) [John *i* wanted [△ *i*+ to meet at 6]] . (Landau 2000 : 28, 表記改変)

英語などでは、partial control の可否は、主節の動詞によって決まる (Landau)。want はそれが可能な動詞の一つ。

オリア語の目的語制御構文に関しては、partial control の可否は、使役主 X が人であるか・非情物であるかで決まる。例文(19)(20)は、複数人について叙述する副詞節「皆が連れ立って」を含む。これら例文が言おうとしている意味では、controller はバピ 1 人 (おそらく、彼はお父さん)、動作者は「バピとその家族 (妻子)」という複数人を指す。実際には、X が人の文(19)は適格、X が非情物の文(20)は不適格である。

- (19) *saar upadesa de-i baapi-ku seThiki samaste ekaThi he-i bul-i j-ibaa paai~ baadhya ka-l-e.*
 sir advice give-CP Bapi-OBJ there all get.together-CP go.around-CP go-INF compel-PAST-3p
 「あの方は、助言を与えて、バピにそこで皆が連れ立って旅行にいくようにさせた。」

- (20) **saaranka upadesa baapi-ku seThiki samaste ekaThi he-i bul-i j-ibaa paai~ baadhya ka-l-aa.*
 sir's advice Bapi-OBJ there all get.together-CP go.around-CP go-INF compel-PAST-3s
 「あの方の助言は、バピに皆が連れ立って旅行へいくようにさせた。」

(19)と(20)の間の対比は、以下のように説明できる。

副詞節「皆が連れ立って」は、動詞の CP 形である。CP 形の分布は、一般には、(21)にしたがう。

- (21) 動詞 CP 形の主語は、意味構造上で動詞の動作者 (actor) である。
 (それは、統語構造上で節の主語であることが多いが、必ずしもその必要はない。)

例文(19)(20)において、副詞節「皆が連れ立って」の主語は次のように決まる。(22)は、使役主 X が人の場合。補文に主語△がある。△は、controller 「バピ」*i* と partial control の関係を結んで、[バピ+その家族] *i* + という複数人を指示する。そして、△は、副詞節の主語として採用される。一方、(23)は、X が非情物の場合。△はなく、動詞「行く」も名詞句「バピ」も複数人を指さない。副詞節は、その主語を探し出せず、現れることができない。

- (22) [あの方が バピ_{*i*}に [△*i*+ [皆が連れ立って-CP_{*i*+}] 行くように] 義務を負わせた] (=19)

- (23) * [あの方の助言が バピ_{*i*}に [[皆が連れ立って-CP_{*i*+}] 行くように] 義務を負わせた] (=20)

なお、(24)のように、X が非情物であっても Y の指示対象が複数人であれば、副詞節「皆が連れ立って」は現れうる。ここで副詞節の主語として採用されているのは、動詞「行く」の動作者である。(補文中に統語構造上の主語△はない。しかし、CP 形の主語には、統語構造上の主語でなくてもなれる；(21)の補足文を参照されたい。)

- (24) [店主の指示が 彼ら_{*i*}に [[皆が連れ立って-CP_{*i*}] 行く_{*i*} ように] 義務を負わせた]

2.5 ⑤ (補文動詞 V1 が他動詞の場合に、その) 対象が 1 または 2 人称になれるか

目的語制御構文で、補文動詞 V1 が他動詞であるものに関しては、人称制限がある。同制限は、使役主 X が人の場合(25)には、見られない。同制限は、X が非情物の場合(26)に観察される：V1 の対象は 3 人称ならよいが、1 人称・2 人称であってははいけない。

- (25) *baapaa saara-nku ethara { se pilaa-ku | maNTuku | mo-te | tumaku } paDhe-ibaa paai~ baadhya kar-ich-anti.*
 father sir-OBJ this.time that kid-OBJ | Montu-OBJ | me-OBJ | you-OBJ teach-INF compel-PERF-3p
 「お父さんは、先生にこのたび {その子を | モントゥを | 僕を | 君を} 教えるようにさせた。」

- (26) *baapaanka anurodha saara-nku ethara { se pilaa-ku | maNTuku | *mo-te | *tuma-ku }*
 father's request sir-OBJ this.time that kid-OBJ | Montu-OBJ | me-OBJ | you-OBJ
paDhe-ibaa paai~ baadhya kar-ich-i.
 teach-INF compel-PERF-3s

「お父さんの要請は、先生にこのたび {その子を | モントゥを | ***僕を** | ***君を**} 教えるようにさせた。」

(26)の例文作成に当たっては、ku の連続 (2.1) を避けるために、2つの目的格名詞句(「先生-OBJ」と「君-OBJ」など)の間に短い語「このたび」を挟んだ。

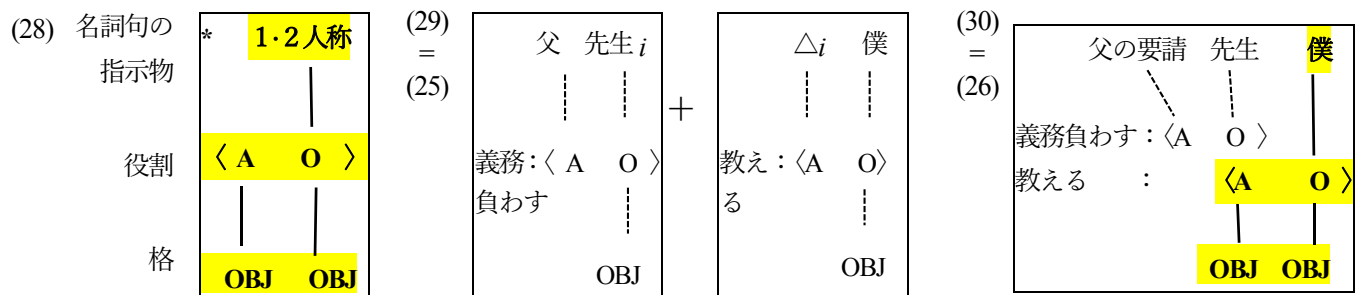
例文(25)と(26)の対比は、以下のように説明できる。

当該の人称制限は、(27)のように述べられる(山部 2014)。

- (27) 同一節の動作者と対象がともに目的格 OBJ で表示される場合、対象は1あるいは2人称であってはならない。

排除される状況を図にすると、(28)になる。記号：A=動作者、O=対象。

例文(25)(26)については、それぞれの意味構造を、(29)(30)のように考える。restructuring を受けない文・受けた文の意味構造(山部 2014,2015)をそれぞれに当てはめたものである。使役主 X が人の場合(29)=(25)には、文は restructuring を受けておらず、動詞(V1とV2)ごとに対して、誰が誰に何するかが解釈される。(29)の図では、文を2個の四角領域に分けて表してある。一方、X が非情物の場合(30)=(26)では、文は restructuring を受けており、一括した2動詞に対して解釈が行われる。(30)の図では、文を1個の四角領域にまとめて表してある。



(29)では、文の2部分が別々に解釈されるおかげで、(27=28)のような(排除される)状況が起きずにすむ。したがって、人称制限は見られない。一方、(30)では、文全体が一括して解釈されるせいで、補文動詞(教える)の対象Oが1または2人称だと、(27=28)に当たる配置((30)影の部分)が生じる。その結果、人称制限が観察される。

3. なぜ、ある場合に restructuring が起きるか

第2節では、使役主 X が非情物である場合に文が restructuring を被ることを示した。第3節では、その場合にそうなるのはなぜか、理由について論ずる。

先行研究における了解によれば、restructuring の(非)生起は、主節述語 V2 をなす動詞の語彙的特徴によって決定される、とされる。例えば、Wurmbrand (2016 : 270) によれば、関係する文法的仕組みは統語的選択制限であって、各動詞はどんな統語的範疇の補文をとるか指定している、とされている。

オリア語の事象においては、主節述語 V2 を構成する語彙素(形容詞、「kar-ならせる」)は、X が人であるか(2)・非情物であるか(3)で相違しない。したがって、(先行研究の了解を敷衍して) restructuring(非)生起の理由を V2 の構成要素(動詞 kar-あるいは形容詞)の語彙的特徴に求めることは、できない。

本発表の説明は、以下のとおりだ。

オリヤ語には、文中における格標示の配置に関して、(31)の制約がある。

(31) 次の配置は不可：

原因主語 ... NOM 標示の名詞句 ...

この制約の仕業は、例えば、他動詞文において観察される。非情物の対象は、人が主語の文(32)では、目的格 OBJ でも主格 NOM でもよい。しかし、原因主語の文(33)では、主格は不可になる。

(32) *mantri hi~ nirmaaNa- { kaama-ku | kaama } banda kar-e-il-e.*
minister EM construction work-OBJ | work stopped make-CAUS-PAST-3p
「大臣が、建設作業を (OBJ | NOM) 止めさせた。」

(33) *mantrinka nirddesa hi~ nirmaaNa- { kaama-ku | *kaama } banda kar-e-il-aa.*
minister's direction EM construction work-OBJ | work stopped make-CAUS-PAST-3s
「大臣の指示が、建設作業を (OBJ | *NOM) 止めさせた。」

(31)は個別言語の文法的な決まりだが、それについては機能的な動機を次のように指摘できる。例文(33)のように、主語とそうでない名詞句がどちらも非情物だと、両名詞句について文法関係を取りづらくなる。

(31)について補足すると、ここで言う原因主語とは、非情物主語全般よりやや狭い範囲にあたり、事態の単独の引き起こし手でないものである。例えば、例文(33)では、建設作業の中止をもたらした主体は、大臣の指示と現場の作業員のどちらかだけとは断じ難い。これに対し、例文(34)では、主語(風)は、窓の閉鎖をもたらす働きをした唯一の主体である。窓は閉まる変化を受けているが引き起こしていない。ここでは対象(窓)は主格でもよい。

(34) *se jor pabana hi~ { jharakaa-guDaa-ku | jharakaa-guDaa } banda kar-e-il-aa.*
that strong wind EM window-CL-OBJ | window-CL closed make-CAUS-PAST-3s
「その強風が窓(複数個)を (OBJ | NOM) 閉めた。」

非情物主語の目的語制御構文は、もし補文として S を取ると、(35)のようになる。これは制約(31)に抵触して排除される。△のない構文(5)を採ったときだけ、すなわち、restructuring を被ったときだけ、生き残れることになる。

(35) * [非情物(原因) が Y_i に [S \triangle_i NOM [V1 するように]] V2 する]

制約(31)の機能的動機(上述)は、(33)と比較して(35)においてより切実である。(35)では、主語(文全体の主語)が非情物で、そうでない名詞句が人であり、文法関係と指示物の対応のしかたがふつうとは逆になっている。

記号 例文のグロス：CAUS=causative; CL=classifier; CP=conjunctive participle; EM=emphatic; INF=infinitive;
NOM=nominative, OBJ=objective; p=plural, PAST=past; PERF=perfect; PROG=progressive; Q=question; s=singular;
1/2/3=1st/2nd/3rd person; *網掛け=不適格な表現
オリヤ語の発音：a [ə], aa [a], D,L,T=retroflex, ~ =vowel nasalization.

引用文献

- Landau, Idan (2000) *Elements of control*. Dordrecht: Kluwer.
Wurmbrand, Susanne (2001) *Infinitives: restructuring and clause structure*. Mouton de Gruyter.
_____ (2016) "Complex predicate formation via voice incorporation." In Léa Nash & Pollet Samvelian, eds., *Approaches to complex predicates*, pp.248–290. Leiden: Brill.
山部順治 (2013) 「オリヤ語における二重目的格制約」『日本言語学会第 147 回大会予稿集』
_____ (2014) 「オリヤ語オリヤ語の複合述語にかかる人称制限」『日本言語学会第 148 回大会予稿集』
_____ (2015) 「オリヤ語における小さい複文—2 種類の再構成 (restructuring)—」『日本言語学会第 151 回大会予稿集』